

ヒューマン・ア・マル・ボンド大賞創設

共生を考える対談



なか がわ し ろう
中川 志郎さん

命実感する契機に

「ヒューマニティを以ていふのでなしに、
習慣に絶つてしまふことゝして、
つけようとね。」

柴内　核家族で、我慢や
いたわりとかを経験しない
子で育った子どもたちが集ま
ると、面倒なものは排除さ
れ、弱い者は放置すればいい
としか考えられません。

例もあるようです。弱いな
か住宅を買っても、必要な
ものがないからと、

か、心配な人は遠ざける風
潮でしょう。マンションで
の犬の飼育を禁止した管理
規約が有効、という判決も
出ました。

昨年の暮れでした

合住宅だからこそ、動物と共に暮らそうというのが私の願いです。一律禁止にならないためにも、飼う人がルールを厳守することが基本。それには教育や啓発を徹底することです。私どもの協会では小学校の学年別に外国の本を翻訳して、全国に配りたいと思っています。お年寄りのためのハンドブックも準備しています。犬や猫も、しつけをちゃんとすれば、部屋も足洗場もいりません。

柴内 ええ、昨年十二月に横浜地裁で判決があり、いま高裁で審理中です。集

柴内 自然から引き離れた責任大

中川しついで本当の共存可能に

達していますか。

柴内　正しいケアをしている方もたくさんいますが、多くの動物が放棄されているのが現実です。生後六か月とか一年たってからでは、しつけができない動物もいます。すると放棄されて、動物たちが大変不幸

る人は一旦、回散歩に連れ出すということだけ。そうしないと、犬もフラストレーションがたまってしまう、近所迷惑にもなるという配慮からなんですわ。日本もそうならなければ。

動物格の尊重を

お年寄りの相手にいいとか……。それでは役に立たなくなったら捨てることになり、本当の「ヒューマン・アニマル・ボンド」は生まれない。動物にも「動物格」がある。だから「ペット」から「コンパニオン・アニマル」に変わったんです。

中川 盲導犬にしても、聴導犬にしても働ける期間に限られています。感覚が衰えたら役に立たないのは当たり前ですね。感覚が衰えるはず。自然から動物を隔

言導犬の老後対策が、のヒザの上のウサギに隣犬が飛びつくようなことはしません。こうした活動によって、動物が広く社会に受け入れられると信じています。そうなればわざわざ訪問しなくても、動物たちが自然に人間と共に暮らさ

中川 動物には純粋野生動物と、純粋野生動物を人間の管理下で飼う動物園のようなものと、家畜と、愛がん動物としてのペットとがあります。愛がん動物は動物と一緒に暮らしやすいように飼育し、人に人間が手を加えてきた。しつけやトレーニングは、彼らにとっても人間にとってもいいことなんです。自然にさせるのが愛情だと思ひます。——日本ではペットを飼つてゐる人は、そのレベルに、一定のしつけをすべし、それほど難しいことはな

になる。ニューヨークの高層ビルに猫を連れて行つて住み、最近帰国した方がいます。そのビルでは、皆が動物を飼っているそうです。規則は、犬を飼っています。生活科教育とか、そんな社会を実現するための提言を。

中川 人間の役に立つから飼うという理由が前面に出過ぎていないか、気になる。規則は、犬を飼っています。生活科教育とか、

一緒に暮らすパートナー、えた時にどうなっているの、離した以上は、人間が正しく面倒を見なくてはいけない」といいうことも理解してもらえろと思います。

柴内 CAPP運動の主役は、訪問する動物たちです。健康で清潔で、心が優しくて、お年寄りや子どもざいました。